

令和元年6月5日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370802

研究課題名(和文)大隈重信の「文明運動」に関する総合的研究

研究課題名(英文)OKUMA Shigenobu's Civilization Movement

研究代表者

真辺 将之 (Manabe, Masauki)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80546721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：この5年間にわたって、大隈重信の文化的活動を、政治活動との関連を視野に入れながら、研究を進めてきた。この5年間に形にしえた代表的な成果としては、『大隈重信 民意と統治の相克』（中央公論新社、2017年）が挙げられるが、それ以外にも多くの論文や研究報告・講演などを行い、研究を進めることはもちろん、その社会への還元を行うことができたと考える。とりわけ、第二次大隈内閣期に見られる「大隈人気」の背景として、「文明運動」と呼ばれる大隈の文化的な活動が果たした役割を克明に明らかにし、さらにその文化的活動の内実や、大隈没年に至るまでの文明思想の変化を明らかにしえたことは大きな成果であったと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の大隈重信研究の問題関心が政治家としての大隈に着目したものであり、したがって多くが政治史ないし財政史的視野からなされたものがほとんどであった。それに対し、本研究は、彼の文化的活動に着目し、思想史的手法をも交えて大隈重信の活動を検討することによって、大隈重信政治的リソースがどのように形成されたか、また文化的活動の前後を通して、大隈自身の政治的姿勢がどのように変化したのかを明らかにすることにつながった。

研究成果の概要(英文)：For five years until last year, I performed a study on cultural activity of Shigenobu Okuma. A representative research result is a book entitled "Okuma Shigenobu" published by Chuo Koron Shinsha. In addition to that, many papers, research presentations, lectures, etc. were left as an outcome. In particular, I clarified how his cultural activities and his political activities are related. Furthermore, I was able to clarify the change of his thought of civilization, especially about peace.

研究分野：日本近現代史

キーワード：大隈重信 文明運動 第二次大隈内閣 民衆政治家 民意 統治 大日本文明協会 早稲田大学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

10年ほど前から、政治家に関する評伝が数多く発表され、近代日本の政治史研究は、人物研究という側面から活況を呈してきた。しかしながら大隈重信に関しては、その顕彰を目的とし、記述に誤りの多い『大隈侯八十五年史』が、いまだもっとも詳細な伝記として使用されている状況にあることに象徴されるように、藩閥系の政治家や原敬ら政友会系の政党政治指導者に比して立ち遅れている状況であった。

もちろん、明治一四年政変以前の時期については、渡辺幾治郎氏による政局史的な研究や、中村尚美氏らによる大隈財政に関する研究など、古くからの蓄積が存在しており、また、立憲改進黨結党から1907年に大隈が政党を離れるに至るまでの大隈の政党指導のあり方については、五百旗頭薫氏の研究や木下恵太氏の研究など、新しい研究も出てきていた。ただしそれらの研究は大隈個人というよりも大隈系政党全般を扱ったもので、かつ財政・経済政策論に比重が置かれている点では、かならずしも十分なものとはいえない点があった。また、第二次大隈内閣以降に関しては、この時期を総合的に扱った単著こそないものの、関連する研究論文が多数発表されてはいた。

しかしながら、1907年に大隈が政党を以て降、第二次大隈内閣の成立によって政界に復帰するまでの時期、ならびに第二次大隈内閣退陣後の大隈に関する詳細な研究は皆無といってよい状況であった。わずかに柳田泉『明治文明史における大隈重信』が、大隈の「文明運動」に一定の紙幅を割いているに止まる程度であった。従来、大隈重信の「文明運動」に関する研究が存在してこなかった理由としては、従来の研究の問題関心が政治家としての大隈に着目したものであったのに対し、この時期の大隈が政党から離れて社会的・文化的活動を主に行っており、通常政治史的手法によってはアプローチしにくかったことが大きいと考える。従来の大隈研究の多くは政治史ないし財政史的視野からなされたものがほとんどであり、したがって、大隈の文明運動については、概説的な域を出る研究が全くなされてこなかったのである。

2. 研究の目的

以上のような研究状況のなかで、「民衆政治家」としてのイメージが強く、社会からの大きな支持を得ていた大隈を研究する上では、研究を政治史の内部で完結させることはできず、より広い社会全般との接点を踏まえた上で、研究をすすめる必要があると感じるに至った。特にこの「文明運動」に関する研究がほとんどないことは、政治家としての大隈のスタンスを考える上でも、また第二次大隈内閣時の国民的人気の源泉を考える上でも、そしてさらにその「文明運動」そのものの持つ思想史・文化史的な意義を考える上でも、日本近代史研究の上における大きな欠陥点となっているように感じた。そこで、文明運動を軸に、その活動の内実を明らかにしていくとともに、それを通じて、政治家としての大隈重信の再検討を果たすことを研究の目的に据えた。

3. 研究の方法

本研究では、日露戦争後における『開国五十年史』の編纂・出版から、1922年に大隈が没するまでの大隈の「文明運動」を総合的に取り扱うこととした。まずは大隈が関わった学術団体・運動の全容を把握することにつとめた。そのうえで、各団体・運動ごとに、それぞれの団体・運動の目的、具体的な活動内容、大隈自身がそこにどう関わり、何を主張したのかを検討するために、それら団体にかかわる資料を網羅的に収集した。『読売新聞』『朝日新聞』や雑誌記事索引等の検索可能なデータベースを活用して大隈の活動に関する情報を集めるとともに、大隈が経営に携わっていた『報知新聞』や雑誌『新日本』『大観』についても、可能な限り収集した。ただし、大隈の活動の範囲の広さと時間的な長さもあいまって、すべてを網羅的に収集することはできず、特に『報知新聞』に関しては明治期の調査が手一杯で、大正期までその記事を収集・分析することはかなわなかった。また大隈が発行していた雑誌『新日本』の復刻版が出版されたため、その復刻版も検討材料として購入した。

また大隈側近で早稲田大学図書館長を務め、大日本文明協会や国書刊行会など大隈の「文明運動」とも種々な関わりを有していた市島春城の関係史料が早稲田大学図書館に所蔵されているが、この市島関係史料、特にその手記類を、分析の材料として調査した。市島の関係史料については、その全体像も不明であったため、その仮目録を作成するとともに、内容について、大隈の登場する部分を中心に調査を行った。

これらの史料を分析するに際しては、各団体・運動の個別研究の集成とならないためにも、(1)それらの活動をつなぐ要素は何なのかを大隈自身の政治的立場と思想的主張との双方から探るとともに、(2)そこから大隈の晩年の理念とされる「東西文明の調和」の理念がどのように形成され、かつどのように変遷したのかに着目し、(3)その上で、大隈のこれら「文明運動」が政治史と思想・文化史との双方においてどのように位置づけられるのかを明らかにすることを目指した。そのため、分析にあたっては、『開国五十年史』出版以前の大隈の活動をも視野に入れ、そこでの政治活動のあり方と、文明運動開始後の活動との比較、ならびにそこにおける大隈の姿勢の変化などに留意することとした。

4. 研究成果

代表的な成果としては、『大隈重信 民意と統治の相克』(中央公論新社、2017年)が挙げ

られる。またそれ以外にも別項に記載するような、多くの論文や研究報告・講演などを行い、研究を進めることはもちろん、その社会への還元を行うことができたと考える。とりわけ、第二次大隈内閣期に見られる「大隈人気」の背景として、「文明運動」と呼ばれる大隈の文化的な活動が果たした役割を克明に明らかにし、さらにその文化的活動の内実や、大隈没年に至るまでの文明思想の変化を明らかにしえたことは大きな成果であったと考える。

上記書籍において特に具体的に明らかにしえた事実としては、以下の点が挙げられる。第一に、『開国五十年史』を編集し日本の発展の過程を跡付ける作業のなかから、「東西文明の調和」という、文明運動の中心的理念が導き出されてきた事実を指摘したことである。特に、『開国五十年史』は、日本の特殊性や優秀さを強調するのではなく、これまでの日本の発展はあくまで西洋文明の導入によるものであるとし、独善的な文明観を排して諸文明の調和こそが重要であるとしていること、および、日本文明の発展はいまだ不十分であり、多く欠点も存在するとして、さらなる発展と、欠点の克服を説いている点で、自画自賛・自己満足的な日本文化論とは一線を画すものであったことを指摘した。第二に、『国民読本』以降、大隈がこの教科書をもとにしたより具体的な教育のための活動が必要であると考え、種々の教育活動を行い、特に通信教育などを通じて、比較的下層に位置する民衆に教育を普及させようとした事実を指摘し、特にそれが大隈の立憲国民育成の理念と結びついていたこと、ならびに、地方に大隈人気を醸成する一助となったことを指摘した。第三に、同仁会、『日本大百科事典』編纂事業、国書刊行会、文芸協会、日印協会、大日本文明協会、南極探検後援会、日本自動車倶楽部、帝国飛行協会、大日本平和協会、軍人後援会などの、大隈のかかわった各種団体や事業について、その詳細を明らかにするとともに、それぞれの会がどのように大隈の文明認識と結びついていたか、相互にどのような関係にあったかを明らかにした。第四に、人生一二五歳説の詳細と、その大隈人気の醸成に果たした役割を指摘するとともに、その背後にある大隈の生活様式や、大隈の性格を明らかにした。第五に、その文明認識が、中国政策とどのような関係にあったか、特になぜ中国への支援を行っていた大隈が、二十一か条要求の提出のような対中国強硬姿勢をとったのか、その思想的背景を分析した。第六に、晩年の「東西文明の調和」論の探求およびその結果としての「教化的国家論」の提唱や、それと結びついた平和論の徹底化や植民地統治のあり方への批判などを明らかにした。いずれも従来の研究では、まったく触れられていないか、あるいは表面的にしか論じられていないものであり、その意義は大きいと自負する。ただし、個別の団体に関しては、まだまだ論じる余地のあるものもあり、それについては、今後、さらに個別論文として発表するための準備を進めていきたいと考えている。

なお、『国民読本』を中心とする大隈の国民教育活動については、編著書『明治期の天皇と宮廷』に収録した論文「大隈重信の天皇論 立憲政治とのかかわりを中心として」において詳しく明らかにすることができた。同論文では、大隈がなぜこの国民教育活動において、皇室や天皇の存在を基軸に据えて、『国民読本』を編纂し、そうした天皇を中心とする日本の国体を強調したのか、ということ进行分析した。大隈がそうした天皇・皇室と、それを中心とする日本の国体を強調したのは、大隈自身が感じていた、国民の政治的未成熟という状況をどう挽回するか、という戦略と関わっていた。すなわち、大隈率いる政党は1907年の大隈の憲政本党総辞任に到るまで、結局一度も自由党～政友会系の政党に対して大勝利をおさめることができなかったが、大隈が腐敗していると考えた自由党～政友会系政党に勝利を与えているのは、ほかならぬ国民であり、その国民が、金銭などに目をくらませて、選挙権を正しく行使していないと大隈は観察したのであった。そこで、日本の立憲政治は天皇から与えられた貴重なものであり、その運用にあたっては、その憲法に規定された権利こそ重視しなければならないという論理で、国民に対して憲政教育を行おうとしたのであった。したがって、大隈の憲法論や天皇論においては、「権利」というものが何よりも重視されることになった。以上のことを前掲論文において明らかにすることができた。

従来の大隈重信研究の問題関心が政治家としての大隈に着目したものであり、したがって多くが政治史ないし財政史的視野からなされたものがほとんどであった。それに対し、本研究において、彼の文化的活動を、思想史的手法をも交えて大隈重信の活動を検討することによって、大隈重信政治的リソースがどのように形成されたか、また文化的活動の前後を通じて、大隈自身の政治的姿勢がどのように変化したのかを明らかにすることにもつながった。その意味で、本研究の成果は、単に文化史・思想史上において意味を持つだけでなく、政治史研究にも資するところの大きいものとなったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

真辺将之、東京専門学校における接続問題と大学昇格問題、近代日本研究、査読有、31巻、2015年、73-108頁

真辺将之、早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから 早稲田大学百五十年史にむけて(全国大学史資料協議会東日本部会総会講演録)、早稲田大学史記要、査読無、2016年、47巻、225-266頁

https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=27497

真辺将之、津田左右吉と東京専門学校・早稲田大学 早稲田大学大学史資料センター所蔵資

料を中心に、津田左右吉とアジアの人文、査読無、2016年、2号、55-96頁
真辺将之、日本近代史研究的動向と若干問題、南開日本研究、査読有、2016年、2016年巻、185-197
真辺将之、『大隈重信関係文書』活用のために 利用者の立場から、早稲田大学史記要、査読無、2016年、48巻、225-266頁
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=36468
真辺将之、停滞は死滅である 大隈重信の生涯と人間像、早稲田大学史記要、査読無、2017年、49巻、41-70頁
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=41599
真辺将之、2017年の歴史学会 回顧と展望 日本近現代一総論、史学雑誌、査読無、2018年、127-5巻、151-154頁
真辺将之、大隈重信と政治家育成機関としての早稲田大学、松村謙三先生を伝えようフォーラム報告書、査読無、2018年度版、1-14頁

〔学会発表〕(計15件)

真辺将之、東京専門学校から早稲田大学へ 「学問の独立」のゆくえ、大学経営セミナー(招待講演)、2014年
真辺将之、大正期の早稲田大学 早稲田騒動とその背景、大学経営セミナー(招待講演)、2014年
真辺将之、早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから 『早稲田大学百五十年史』にむけて、全国大学史資料協議会東日本部会2015年度総会(招待講演)、2015年
真辺将之、『大隈重信関係文書』の活用のために 利用者の立場から、早稲田大学大学史資料センター主催シンポジウム「大隈に手紙を寄せた人びと - 大隈重信へのまなざし - 」(早稲田大学大学史資料センター)(招待講演)、2015年
真辺将之、津田左右吉と東京専門学校・早稲田大学 早稲田大学大学史資料センター所蔵資料を中心に、日本思想史学会大会、2015年
真辺将之、昭和戦前・戦中期の早稲田大学 「模範国民」理念の溢出と「学問の独立」の消滅、大学経営セミナー(招待講演)、2016年
真辺将之、日本近代史研究の動向といくつかの問題、南開大学日本研究院日本研究講座(招待講演)、2016年
真辺将之、明治一四年の政変再考、第2回東アジア日本研究者協議会国際学術大会、2017年
真辺将之、反欧化主義者の政党認識 東アジアの文脈における議会と政党、国際シンポジウム明治維新と近代世界(招待講演)、2018年
真辺将之、コメント(ロバート・ヘリヤー報告「中国から学び、西洋に売り込む 文明開化における中国のノウハウ」に対して)、国際シンポジウム明治維新と近代世界(招待講演)、2018年
真辺将之、大隈重信 民意と統治の相克、早稲田大学春秋会(招待講演)、2018年
真辺将之、大隈重信と政治家育成機関としての早稲田大学 松村謙三との関わりを中心に、松村謙三先生を伝えようフォーラム2018(招待講演)、2018年
真辺将之、明治維新と政党認識 政党の「部分性」と公共性・ナショナリズムの相克、国際シンポジウム近代東アジアにおける知識移転と政治変容(招待講演)、2018年
真辺将之、総括コメント、国際シンポジウム近代東アジアにおける知識移転と政治変容(招待講演)、2018年
真辺将之、明治思想史研究 人物研究の現状と課題、青山学院大学史学科・史学会50周年記念シンポジウム国際環境下の明治 「明治150年」の研究成果から考える“明治史”、2018年

〔図書〕(計5件)

安在邦夫・真辺将之・荒船俊太郎(編著) 梓出版社、明治期の天皇と宮廷、422頁
真辺将之(著) 中央公論新社、大隈重信 民意と統治の相克、495頁
小林和幸(編) 筑摩書房、明治史講義テーマ編、159-178頁(分担執筆)
中野目徹(編) 吉川弘文館、近代日本の思想をさぐる、81-107頁(分担執筆)
津田左右吉(著) 中央公論新社、日本の皇室、5-16頁(解説執筆)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。